

令和6年度病虫害発生予報第1号の発表について

このことについて、次のとおり発表したの送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量
麦類	赤かび病	並
	アブラムシ類	並
モモ	せん孔細菌病	並
	うどんこ病	並
	ナシヒメシンクイ	多
カキ	炭疽病	やや多
	フジコナカイガラムシ	やや多
果樹の共通害虫	クワゴマダラヒトリ	やや少
	ハマキムシ類	多
ブロッコリー	花蕾腐敗病	多
	べと病	やや多
	アブラムシ類	やや多
レタス	灰色かび病	並
	菌核病	やや少
	べと病	やや多
	アブラムシ類	やや多
タマネギ	べと病	やや多
	腐敗病	やや多
	ネギアザミウマ	並
ニンニク	春腐病	やや多
	さび病	並
	ネギアザミウマ	並
イチゴ（施設本圃）	うどんこ病	やや多
	灰色かび病	やや多
	アブラムシ類	やや多
	コナジラミ類	並
	ハダニ類	やや多
	アザミウマ類	多
野菜、花きの 共通害虫	コナガ	並

太文字の病虫害：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

* 予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

令和6年度 病害虫発生予報 第1号（4月）

A. 麦類の病害虫

1. 赤かび病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 令和6年産のはだか麦、小麦の開花時期は平年並と予想される。（±）
(2) 4月の気象は、気温は高く（+）、降水量は平年並か多い（+）予報である。

対 策 (1) 防除適期である開花始め頃の防除を実施するとともに、開花～乳熟期に気温が高くて天候不順が続く場合は、追加防除を徹底する。
(2) 病害虫防除所ホームページ(<https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>)で、播種期別の開花期予想や防除に関する情報を10日程度の間隔で提供しているので、適期に防除を実施する。
(3) 圃場が過湿にならないように排水を徹底する。

2. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 3月中旬のはだか麦、小麦ともに発生量は平年並（±）であった。
(2) 4月の気象は、気温は高く（+）、降水量は平年並か多い（-）の予報である。

対 策 (1) 1穂当たり7～11頭（寄生穂率に換算すると60～80%）寄生している圃場では、早急に防除を実施する。
(2) アブラムシ類の防除により、害虫全般の発生を少なくする。

B. 果樹の病害虫

一モ モー

1. せん孔細菌病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 一般圃場での前年秋期の発生量はやや少なかった。（-）
(2) 4月の気象は、降水量が平年並か多い予報である。（+）

対 策 (1) 発病枝は伝染源となるので、見つけ次第除去する。
(2) 発病後の防除は効果が劣るので、4月下旬から予防的に薬剤散布する。
(3) 病原菌は自然開口部（気孔、水孔等）や傷口から風雨とともに侵入するので、風当たりの強い園では防風ネット等の防風対策を行う。

2. うどんこ病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 一般圃場での前年の発生は平年と同様に認めなかった。（±）

対 策 開花期～幼果期に2回程度薬剤散布する。

3. ナシヒメシンクイ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **多**

根 拠 (1) 県予察圃場のフェロモントラップにおける前年9月の誘殺数は多かった。
(+)

(2) 一般圃場での前年秋期の発生量は多かった。(+)

(3) 4月の気象は、気温が高い予報である。(+)

対 策 4月中旬～6月下旬に、他の害虫との同時防除も兼ねて10日おきに薬剤を散布する。

－カ キー

1. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 前年秋期の発生量は平年並であった。(±)

(2) 4月の気象は、気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(+) 予報である。

対 策 展葉期から定期的に薬剤を散布する。

2. フジコナカイガラムシ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 一般圃場での前年秋期の発生量はやや多かった。(+)

対 策 越冬虫が越冬場所から新梢に移動する展葉期以降、定期的に薬剤を散布する。

－果樹の共通害虫－

1. クワゴマダラヒトリ

予 想 発生地域： 山林隣接園

対象作物： カンキツ、モモ、カキ、ブドウ、ナシ、ウメ、ビワ、
キウイフルーツ等

発生量： やや少

根 拠 (1) 前年の県予察圃場での予察灯における誘殺数は少なかった。(－)

(2) 前年秋期の産卵植物(アカメガシワ)での巣網の発生はやや少なかった。
(－)

(3) 春期の産卵植物(アカメガシワ)周辺の雑草における越冬幼虫の発生量は平年並であった。(±)

対 策 (1) 果樹園周辺部、特に雑木林外縁部での越冬幼虫の発生状況に注意する。

(2) 果樹園内を主体に下草の除草を行い、園内に侵入させないようにする。

(3) 幼虫の発育が進むと効果が劣るので、果樹園での発生を認めたら直ちに薬剤を散布する。

2. ハマキムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **多**

根 拠 県予察圃場のフェロモントラップにおける前年秋期の誘殺数は多かった。
(+)

対 策 幼虫発生時期(4月中下旬)から定期的に薬剤を散布する。

C. 野菜、花きの病害虫

ーブロッコリーー

1. 花蕾腐敗病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **多**

- 根 拠 (1) 3月下旬の発生は平年と同様に認めなかったが、一部の地域でやや多かった。(+)
(2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(+)
(3) 3月は降水量が多く経過し、この時期に発蕾した場合発生が多くなる。(+)
(4) 4月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 薬剤防除は予防的に実施する。
(3) 生育期に銅剤を含む薬剤を散布して圃場内の病原菌密度を抑制し、出蕾期以降に生物防除資材を散布して花蕾を保護する。

2. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 3月下旬の発生は平年と同様に認めなかったが、一部の地域でやや多かった。(+)
(2) 4月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 降雨後や曇雨天で多湿状態が続くときは薬剤防除を行う。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(4) 発病株は放置せずに抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 3月下旬の発生量は多かった。(+)
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での3月のアブラムシ類の誘殺数は、やや多かった。(+)
(3) 4月の気象は、気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(-)予報である。

- 対 策 (1) 定植時には灌注処理や粒剤を施用するとともに、発生増加を認めたら早急に防除する。
(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(3) 今後作付を行う場合は、光反射資材や防虫ネットを張るなどして、アブラムシ類の飛来侵入を防止する。
(4) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

ーレタスー

1. 灰色かび病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **並**

- 根 拠 (1) 3月下旬の発生量は3~4月どりで発生を認めず(-)、5月どりで少なかった(-)。
(2) 4月の気象は、降水量が平年並か多い予報である。(+)

- 対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。
- (2) 圃場の排水を良くする。
- (3) 薬剤散布は株元を中心に、丁寧に行う。
- (4) 苗床からの持ち込みを避け、苗床での薬剤防除を実施する。
- (5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 菌核病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少
- 根 拠 3月下旬の発生量は3～4月どりで発生を認めず（－）、5月どりでやや少なかった（－）。
- 対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。
- (2) 圃場の排水を良くする。
- (3) 薬剤散布は株元を中心に、丁寧に行う。
- (4) 灰色かび病の耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ベと病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 3月下旬の発生は3～4月どり、5月どりともに平年と同様に認めなかった。（±）
- (2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。（＋）
- (3) 4月の気象は降水量が平年並か多い予報である。（＋）
- 対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。
- (2) 発生前から薬剤を予防的に散布する。この場合、薬剤が葉裏に十分付着するように散布する。
- (3) 結球期に発生すると、結球葉まで病気が進展しやすいので、発生を認めたら直ちに防除する。
- (4) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。

4. アブラムシ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 3月下旬の発生は3～4月どりでは認めず（－）、5月どりでは平年と同様に認めなかった（±）。
- (2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。（＋）
- (3) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での3月のアブラムシ類の誘殺数は、やや多かった。（＋）
- (4) 4月の気象は、気温が高く（＋）、降水量が平年並か多い（－）予報である。
- 対 策 (1) 定植時には灌注処理や粒剤を施用するとともに、発生増加を認めたら早急に防除する。
- (2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) 今後作付を行う場合は、光反射資材や防虫ネットを張るなどして、アブラムシ類の飛来侵入を防止する。

- (4) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

－タマネギ－

1. べと病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 3月下旬の早生タマネギでの発生量は多く(+)、中晩生タマネギでは平年並であった(±)。

(2) 4月の気象は、降水量が平年並か多い予報である。(+)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。

(2) 越年罹病株は見つけ次第抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

(3) メタラキシル、マンゼブまたはフルアジナムを含む薬剤、CAA系薬剤をローテーションで散布する。

(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

(5) タマネギと同一の病原菌によって発生するネギのべと病にも注意する。

2. 腐敗病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 3月下旬の発生量は早生タマネギ、中晩生タマネギともに認めなかった。(－)

(2) 3月は降水量が多く経過した。(＋)

(3) 4月の気象は、降水量が平年並か多い予報である。(＋)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに窒素質肥料の多用を避ける。

(2) 被害残さを速やかに除去し、適正に処分する。

(3) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行うとともに、ネギアザミウマなど害虫防除を実施する。

3. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 3月下旬の発生量は早生タマネギでやや少なく(－)、中晩生タマネギで平年並であった(±)。

(2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(＋)

(3) 県予察ほ場での3月下旬の発生量はやや少なかった。(－)

(4) 4月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か多い予報である(－)。

対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(2) ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する可能性があるため、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。

(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－ニンニク－

1. 春腐病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 3月下旬の発生量は平年並であったが、一部の地域で発生量がやや多かった。(+)
 (2) 4月の気象は、降水量が平年並か多い予報である。(+)

 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに窒素質肥料の多用を避ける。
 (2) 被害残さを速やかに除去し、適正に処分する。
 (3) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行うとともに、ネギアザミウマなど害虫防除を実施する。

2. さび病

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： 並

 根 拠 (1) 3月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
 (2) 4月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)

 対 策 (1) 発生圃場では薬剤を散布する。
 (2) 同一の病原菌によって発生するタマネギ、ネギ、ニラのさび病にも注意する。

3. ネギアザミウマ

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： 並

 根 拠 (1) 3月下旬の発生量は平年並であったが、一部の地域で発生量がやや多かった。(+)
 (2) タマネギの県予察ほ場での3月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
 (3) 4月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い予報である(－)。

 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (2) ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。
 (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－イチゴ（施設本圃）－

1. うどんこ病

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： **やや多**

 根 拠 3月下旬の発生量はやや多かった。(+)

 対 策 (1) 薬剤散布は予防的に行う。
 (2) 茎葉が繁茂していると薬剤が十分に到達しにくい場合があるので、丁寧に散布する。
 (3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 灰色かび病

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： **やや多**

 根 拠 (1) 3月下旬の発生量は平年並であった。(±)
 (2) 3月は降水量が多く経過した。(+)

 (3) 4月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)

 対 策 (1) 薬剤散布は発生初期から行う。
 (2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 2月下旬の発生量はやや多かった。(＋)

(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での3月のアブラムシ類の誘殺数は、やや多かった。(＋)

(3) 4月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(2) 茎葉が繁茂していると薬剤が十分に到達しにくい場合があるので、丁寧に散布する。

(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. コナジラミ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **並**

根 拠 (1) 3月下旬の発生量は並からやや少なかった。(－)

(2) 4月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(2) 圃場内に黄色粘着シートを設置し発生状況を把握し、発生初期から薬剤防除を行う。

(3) 多発すると防除が困難になるので、気門封鎖剤などのミツバチへの影響が小さい薬剤を用いて低密度時から防除する。

(4) 一部の薬剤に対して抵抗性の発達が認められるので、作用性の異なる薬剤で防除する。

5. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 3月下旬の発生量は平年並であった。(±)

(2) 4月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 発生が局所的な場合には、気門封鎖剤のスポット散布を行う。

(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

6. アザミウマ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **多**

根 拠 (1) 3月下旬の発生量はやや多かった。(＋)

(2) 4月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 (1) 施設内及び圃場周辺の除草に努める。

(2) 青色粘着トラップを設置して、発生及び侵入状況を早期に確認する。

(3) 花における発生状況をよく観察し、寄生成虫数が100花当たりで10頭になった時または成虫の寄生花率が10%になった時に防除を実施する。

(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－野菜、花きの共通害虫－

1. コナガ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 3月下旬の5月どりブロッコリーでの発生は平年と同様に認めなかった。
(±)
(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの3月の誘殺数は平年並であった。
(±)
(3) 4月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(-) 予報である。

- 対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、成虫の侵入防止対策を講じる。
(2) 定植時に灌注処理や粒剤施用するとともに発生初期から薬剤防除を行う。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

・住宅地等に接した地域及び広範囲に防除する場合は、散布する前に付近住民などに周知するとともに、飛散しにくい農薬を使用するようにしましょう。
・農薬散布は、無風又は風が弱いときに行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選び、風向き、ノズルの向き等に注意して飛散防止を心がけましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>

